

第3回CS3会議 “Chemistry for Better Life” に参加して

CS3 (Chemical Sciences and Society Summit)

CS3は、人類が直面する重要な課題に化学の立場から挑戦するために、毎年異なるテーマを決めて世界5カ国(英、米、独、中、日)の化学者が自由に討議する目的で、一昨年スタートした。この会は、化学者に加えて、Funding Agency(研究資金供与機関)、各国の化学会の代表から構成されるユニークなものである。

第1回のドイツ、第2回の英国に続き、今回は中国における開催であった。今年は主催国側の希望もあり、テーマをChemistry for Better Lifeとし、9月12日～15日まで北京郊外(和園大酒店: Heyuan Royal Garden Hotel)で開催された。

日本から、学術研究活性化委員会が選出した福山透教授(東大)をリーダーとして、高橋孝志教授(東工大)、及川英秋教授(北大)、秋吉一成教授(京大)、菅裕明教授(東大)、菊地(阪大)と、日本学術振興会化学専門調査班主任研究員の太野弘幸教授(東京農工大)のメンバーと、日本化学会から川島信之常務理事が参加した。5カ国からの参加者は、これまでと同じく約40名(各国8名枠)であった。

会議進行方式

正直言って、会議が始まるまでは進め方・目的ともに参加者たち自身のイメー

ジはなく、何を話すべきかについては参加者全員にとって雲をつかむような思いで会議は始まった。しかし結論としては、枠組みがない不安感は全員の一体感を生み出し、枠組みは参加者たちの自主的な工夫で生まれ、各人が建設的な提言をすることによって解決された。言い換えれば、方向性のない自由な討論は、異なる意見を尊重しながら全体の方向性をまとめあげよう、という参加者各人の意識を生み出したと思う。この一体感が重要であるという意味で、40人という少ない人数は適正であった。

会議の進行は4つのセッションを基として、セッションテーマごとに、1名ずつの基調講演と6～10名のポジション・ステートメントが行われ、その都度自由討議をまず行い、最終日に総括会議

を行い、全体のまとめ・対外的なアピールポイントについて討議し結論を出すというプラットフォームに従った。

このうち、4つの各項目とは、1: Synthesis of Bio-active Molecules, Natural Products and Substances, Bio-Catalysis(基調講演: 福山透, 座長: 菊地和也, Biao Yu/中), 2: Novel Chemistry for Diagnosis, Molecular Imaging(基調講演: Horst Kessler/独, 座長: Andreas Marx/独, Xiaohong Fang/中), 3: Chemistry for Drug Discovery(基調講演: Gunda Georg/米, 座長: Joseph Fortunak/米, Weiliang Zhu/中), 4: Chemistry for Discovery Biology(基調講演: Ben Davis/英, 座長: 菅裕明, Duanqing Pei/中)であった。この各項目に対して、各スライド5枚までの10分程度のポジション・ステ

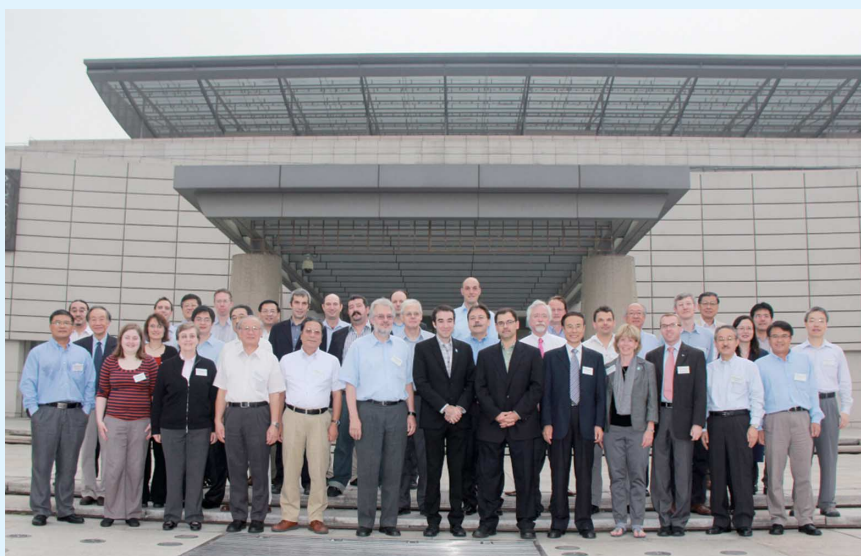


写真1 会議場前で集合写真

ートメントが発表された。この形式については、ほとんどガイダンスはなく皆思いの発表ファイルを作成した。結果として各人が自由なプロポーザルを行ったことで、議論はしやすくなったと考えている。また、参加者によっては電話を介した遠隔参加・発表が行われたが、今回のような会議においては、参加者同士の交流が方向性を決めていた。このため、遠隔参加にはほとんど効果はなかった。

議論の方向

本会議の目標は、該当分野の一般人から専門家までの対外的なアピールポイントを明確にし、近い将来のマイルストーンになるであろう進展を予測し、化学の一般生活に与える効果を説明できるようにすることである。このため、前述の4つのセッションは化学研究内容の違いを基に議論を開始したが、社会的な意義を論じる今回の会議においては目指す方向は、重なり合うものがほとんどであった。どの項目とも今後の生活への寄与を考えると、医薬品の開発、認知症などの高齢化社会における問題解決と脳機能の基礎的理解、診断技術への応用、の各内容への応用目標は必ず含まれるものとなった。

今後に向けた提言

上記のとおり、4つのセッションが2

日目までに終了し、最終日の午前中に提言をまとめる作業が、全員参加で行われた。当初の予定では、4つの項目ごとの部会制でまとめを4つ作る予定であったが、各々のセッションの目標は重なり合うため分けて提言しても同じ結論の重複になりかねないと懸念され、全員まとめて提言をまとめることになった。このように、ほとんどの参加者の意見は近い内容になったが、項目をどのように分けて提言を作るかについては、会議が紛糾した。

その理由は、個々の科学技術を列挙し、社会的意義を書き足そうとしたためである。このやり方では、総花になって、社会へのアウトプットの全体像は見えにくい。議論が個々の課題の袋小路に陥り、全体としては逆に発散して提言まで行き着かないで終わるのではないかと、という危惧がほぼ全員の心の中に生まれたとき（終了約1時間前）、日本代表の菅教授によって、「細かい技術の羅列ではなく、化学の潜在能力の、生活に果たす役割ごとでまとめよう」という、起死回生の提言がなされた。

この結果、1: Chemistry for Better Understanding Diseases (科学技術の発展による病因の解明)、2: Chemistry for Better Understanding Brain and Aging (脳機能解明と高齢化社会への対応)、3: Chemistry for Better Drugs (1,2を応用した薬剤開



写真2 会議のようす

発)、4: Chemistry for Better Diagnosis (1,2を応用した診断技術開発)の4つの提言がまとめあげられた。溜飲が下がる気分になった参加者は、私だけではあるまい。このおかげで、午後以降に行われたエクスカージョンと夕食会には達成感を感じながら参加できた人がほとんどであったにちがいない。

結論へと導く筋道を建設的に提言できたことで、日本化学会の存在を大きくアピールできた瞬間であった。しかし、この会議の一番の功労者は帰国時にパスポートをホテルに忘れ、最もはらはらした参加者になってしまったことは、日本人以外は知らないであろう。

今回は米国での開催が内定しており、テーマが討議されACSとNSFが持ち帰り検討し、5カ国で最終的に決めることとなった。時期は2012年9月、場所は西海岸で調整が開始された。日本は、2013年の開催の準備を進める予定である。

〔菊地和也 (大阪大学大学院工学研究科)〕

© 2011 The Chemical Society of Japan